

異文化間会話における相手の会話行動への評価 —日本人学生とオーストラリア人留学生の雑談の場合—

大 津 友 美

キーワード：異文化間会話、接触場面、コミュニケーション、会話行動、留学生

1. はじめに

留学生の増加に伴い、大学キャンパス内で、日本人学生が留学生と接する機会が増えてきているにもかかわらず、両者の友人関係の形成には困難が伴う。日本人学生と留学生の友人関係形成に関しては、これまでに質問紙調査や面接調査による研究が行なわれ、両者の親密化が困難であることの原因等が明らかにされてきた（坪井 1991、滝沢 1995、横田 1991、田中 2003 など）。しかし質問紙や面接による意識調査では、留学生や日本人学生から得られた回答と実際の行動が異なる可能性がある。また従来の研究では、会話というミクロレベルにおいて検討し、その中でどのような要因が両者の親密化を促進したり阻害したりするかについては明らかにされていない。

異文化間での接触場面においては、様々な誤解が起こるし、互いの行動を非好意的に評価することもある（Marriott 1990、Neustupný 1985、西原 1993）。一方 Fairbrother (2000) によると、相手が期待から逸脱した行動をしたとしても、それが好意的に評価されることもある。親密な関係は実際のコミュニケーションの積み重ねによって形成されるものであり、初対面の会話の中で相手から好意的な評価を受ければ次のコミュニケーションの機会に繋がるであろうし、非好意的に評価されればそれきりとなってしまうかもしれない。そのため両者の親密化を促進・阻害する要因を明らかにするためには、初対面会話において好意・非好意に関わる要因を検討する必要があるであろう。

日本人と外国人の会話における、親密さに関わる行動や表現をミクロレベルで考察した研究に中山（2003）があるが、研究者による観察が主で、会話参加者達が実際に互いの行動をどう評価したのかに関する具体的な分析はない。そこで本稿では、初対面のオーストラリア人留学生と日本人学生との1対1の雑談の録音をデータとし、プレイバック（Playback, Tannen 1984）により、留学生と日本人学生のそれぞれが互いのどんな要素を好意的・非好意的に評価したのか会話時の意識を調査する。

2. 研究方法

データは2段階に分けて収集した。第一段階は初対面会話の録音で、第二段階は筆者

が会話参加者に対して個別に行ったプレイバック・セッションの録音である。データ収集はすべて2006年7月に行った。

2. 1 会話参加者

日本人学生とオーストラリア人留学生の1対1の雑談は2組録音した。会話参加者は全員女性である。日本人学生2名(J1、J2)は共に20歳の大学生である。オーストラリア人留学生(A1、A2)はそれぞれ27歳と22歳で、共にJ1とJ2が所属する大学に短期交換留学生として所属していた。データ収集の時点での滞日期間は約3ヶ月半であり、初級段階の日本語教科書を終え、中級段階に進んだところであった。ACTFL-OPI (Oral Proficiency Interview)の結果では、A1が中級の中、A2が中級の上である。J1とA1、J2とA2がそれぞれ雑談を録音した。

2. 2 初対面会話の録音

録音による緊張を軽減するため、会話は一般の学生達が自由に出入りすることのできる大学ロビーで行われた。録音時にもそこでは一般の学生がおしゃべりをしたり宿題をしたりしていた。筆者はテーブルの上にMDレコーダーを置き、15分経過したらいつでも会話をやめていいことを伝え、録音はすべて参加者たちに任せた。J1・A1組の録音時間は約24分、J2・A2組は約15分であった。

2. 3 プレイバック・セッションの録音

会話録音の2日後に、それぞれの会話参加者に対して個別にプレイバック・セッションを行い、参加者自身に録音を聞いてもらい、会話時の意識について話してもらった。日本人学生には日本語で、留学生には英語で行い、一人約1時間の面談であった。ノートをとることで相手の話の邪魔をしないように、プレイバック・セッションは録音した。まず研究の趣旨を説明し参加者に協力を求め、その後の進め方は基本的にTannen (1984: 37-40)に従った。プレイバックの際は、研究者は相手に影響を与えないように努め、相手が自主的に話してくれるのを待たなくてはならない。そのためカセットプレーヤーの操作は参加者に任せ、話したいときに止めて自由にコメントしてもらい、話し終わったらまた再生してもらうようにした。相手が、筆者が分析の焦点としている部分や、他の参加者がコメントした部分に触れない場合には、できるだけ一般的な質問で相手の注意をその部分に向けさせた。その部分についての筆者自身の考えに言及するのは最後の手段であり、極力避けた。

プレイバック・セッションの後、筆者は、参加者から得られたコメントを、会話相手の行動に対する(1)好意的評価(2)非好意的評価(3)その他の評価に分けた⁽¹⁾。

その後、判定の信頼性を高めるため、もう1名の日本語・英語母語話者にもプレイバック・セッションの録音を聞いてもらい、同様の判定をするよう依頼した。そして両者の意見が一致したものだけを取り出し、いくつかの類型に分けた。

3. 結果と考察

3. 1 相手から好意的評価を受けた会話行動

参加者が好意的に評価した会話行動を類型化したところ、次の四つに分けることができた。それぞれ「(1) 会話相手への関心表示」、「(2) 自己開示」、「(3) 会話進行のための協力」、「(4) リラックスした態度」と呼び、両者の親密化を促進する要因と考える。

(1) 会話相手への関心表示

会話相手についていろいろ知りたいと思っていること、興味・関心があることを示す行動は、日本人学生からも留学生からも好意的に評価されていた。具体的な会話行動の例を挙げると、相手についていろいろ質問すること、相手について既に知っていることを言うこと、相手の名前を呼ぶこと、相手が自身について語っているとき、あいづちや驚きの反応などで相手の話を促し、熱心に聞くことなどが挙げられる。

(2) 自己開示

自分自身について、個人情報や意見を相手に伝える行動も、日本人学生と留学生の双方から好意的な評価を得ていた。相手から、プライバシーに関わる質問をされた際に喜んで答えることや、相手から質問されなくても積極的に自分についての話をするなどがこれにあたる。

(3) 会話進行のための協力

会話進行のための協力には大きく分けて、コミュニケーションを阻む問題の速やかな解決のための協力と、雑談を盛り上げるための協力の2種類がある。

第一に、「コミュニケーションを阻む問題の速やかな解決のための協力」には、相手が自分の言ったことを理解できていないことをすばやく察知して説明を開始すること、ゼスチャーなどを用いて、ことばの意味を分かりやすく説明すること、相手の説明を理解できたことを明示することなどがある。

次の例⁽²⁾は、J1とA1が京都の話をしているところである。J1が1J1で「京都は坂が多いし。」と言ったところ、A1は「坂」ということばの意味を知らなかった。そこでJ1はA1からの要求に応じて、7J1で説明を始めた。その際J1は、自分の手を水平の状態から斜めに動かすゼスチャーを用いている。このJ1の行動について、A1は「説明をするときにゼスチャーをつけてくれると分かりやすい。J1の説明はとてもよく理解できた。」と好意的に評価していた。一方、J1の説明を聞いて、「坂」の意味を理解で

きたA1は、「分かりました。」と言う代わりに、10A1で「運動のためにいいですね。」と発話している。このように、A1が「坂」の意味の理解に基づいて発話したことについて、J1は、「この発言でA1が「坂」の意味を理解してくれたと確信することができた。『ああ』とか『分かりました』と言って終わるだけでなく、『例えばこういうことだよね』と言い換えてくれると、本当に理解してもらえたことを確認できるので安心できる。」と好意的に評価していた。

[会話例1]

- 1J1 : 京都は坂が多いし。
2A1 : ん : あ :

{	What is it ?
	下り坂 上り坂?とか.

3J1 :
4A1 : ん : 分かりません。
5J1 : うん。
6A1 : え : ?
→7J1 : え : っと... [ゼスチャーをしながら] 普通ってこういう平面だけど : →
A1 : Yup.
→7J1 : こういう
8A1 : あ :

{	Hill.
	坂になってる

9J1 :

{	ところ.
	あ, あ : . あ, そう. 運動に..の ためにいいですね : .

→10A1 :

(4) リラックスした態度

本研究では音声データのみを扱っているため、会話の録音には表れていないが、会話参加者から会話中の姿勢に関するコメントが得られた。A1は椅子の背もたれにもたれ、足を組むなど、リラックスした姿勢で会話をしていた。それについてJ1は「A1がリラックスしているのを見て、自分の緊張も解け、リラックスして会話することができた。」と好意的に評価していた。

以上、好意的評価を受けた4種類の会話行動について説明した。それぞれの項目について、各参加者が相手から受けたコメント数は表1のとおりである。

会話行動の類型	会話行動の例	A1	A2	計	J1	J2	計
(1) 相手への関心表示	相手について色々質問する		1	7	1		2
	相手について既に知っていることを言う	1			1		
	相手の名前を呼ぶ	1					
	相手が自身について話しているとき、その話を熱心に聞く(あいづち、驚きの反応等)	4					
(2) 自己開示	自分自身について積極的に情報提供する	1		1		1	1
(3) 会話進行のための協力	コミュニケーションを阻む問題の速やかな解決のための協力	1	1	8	1	2	6
	雑談を盛り上げるための協力(話題の提供、いきいきとした語り等)	5	1		1	2	
(4) リラックスした態度	リラックスした姿勢で話す(椅子の背もたれにもたれる、足を組む)	1		1			0

表1：好意的評価を受けた会話行動

この中で、「(4) リラックスした態度」以外は、留学生にも日本人学生にも共通して見られる要因である。初対面の者同士の会話では、互いを知るために、個人的なことがらに関する話題が多くなる。そのような初対面会話の性質から、「(1) 相手への関心表示」や「(2) 自己開示」は会話の維持につながるため、好意的評価を生むのであろう⁽³⁾。「(3) 会話進行のための協力」が好意的評価に繋がるのは、会話進行の負担の軽減のためであると考えられる。非母語話者との会話であるため、日本人学生は会話前に、自分が母語話者として会話をリードすることになると予想していた。しかしその予想に反して、留学生が積極的に会話を盛り上げたり、コミュニケーションを阻む問題を解決しようとしたりするとき、日本人学生は自分自身の負担が減ったと感じ、相手を好意的に評価するのではないか。同様に、留学生の側には日本語を用いての会話が負担であるため、日本人学生が会話をリードするときには、負担が減ったと感じ、相手を好意的に評価するのであろう。

3. 2 相手から非好意的評価を受けた会話行動

参加者が非好意的に評価した会話行動を類型化したところ、次の六つに分けることができた。それぞれ「(1) 相手への無関心」、「(2) 自己開示の欠如」、「(3) 会話進行に非協力的な態度」、「(4) 避けたい話題の選択」、「(5) 褒めの欠如」、「(6) 母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み」と呼び、両者の親密化を阻害する要因と考える。

好意的評価を受けた会話行動とは異なり、非好意的評価を受けた会話行動6つの種類のうち、留学生側にも日本人学生側にも共通して見られたものは少なく、(1)のみであった。(2)(3)(4)は日本人学生側の方に、(5)と(6)は留学生側の方に見られた。

このうち「(1)相手への無関心」、「(2)自己開示の欠如」、「(3)会話進行に非協力的な態度」はそれぞれ親密化促進要因である「相手への関心表示」、「自己開示」、「会話進行のための協力」が欠けていると参加者が感じたときに生じる非好意的評価であろう。具体的には「(1)相手への無関心」には、相手の話の最中に何も質問しないこと、相手の名前を間違えて呼ぶこと、相手の誘いに乗らないこと、別れの挨拶をしないことなどが含まれる。「(2)自己開示の欠如」は極端に自分自身についての情報提供をしないことである。「(3)会話進行に非協力的な態度」には、話題を提供しないなど、雑談を盛り上げるための協力をしないことが含まれる。

「(4)避けたい話題の選択」、「(5)褒めの欠如」、「(6)母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み」に関しては、以下に例を挙げて説明する。

(4) 避けたい話題の選択

日本人学生が不適切な話題を出してしまい、留学生の気分を害する例がデータ中に見られた。[会話例2]では、J1が年齢の話題を始め、A1がそれを不快に思っている。J1は1J1で「おいくつですか。」とA1の年齢を聞き、さらに3J1ではA1の年齢に驚いて聞き返している。このことについてA1は、「この質問は嫌だった。年齢をごまかそうかと思った。」と述べていた。A1は4A1で「はあ。はい。」と小さい声で嫌そうに答えているのだが、J1はそれに全く気付かず、今度は5J1で「いくつくらいに見えます?」と言って、相手に自分の年齢を当てさせようとした。A1は「この質問も嫌だった。年齢を当てられなくて失礼なことを言ったら嫌だと思った。」と述べ、J1の行動を非好意的に評価していた。A1は8A1で、他人の年齢を当てることは難しくて苦手であることをJ1に訴えるが、J1はA1が嫌がっていることに全く気付いていなかった。

[会話例2]

→1J1 : おいくつですか?年は.

2A1 : 27歳 [] です.

3J1 : [] [大きい声で] 27歳?

4A1 : はあ. [] [小声で] はい.

→5J1 : いくつ [] くらいに→

A1 : [] J1さんは?

→5J1 : 見えます?

6A1 : 見え.. あ : . 見えます.

7J1 : 何歳に... 見える?

8A1 : そうね。Ahm [呼気] にじゅう... あ: 難しい。いつも
 J1 : 難しい難しい。 →
ハハハハハハ

8A1 : これは上手で.. じゃなくて。多分 21。 21ごろと思います。

(5) 褒めの欠如

相手を褒めることを期待されている場面で留学生がそうしなかったため日本人学生の気分を害する例がデータ中に見られた。J2には今までにカナダに2回ホームステイに行った経験があり、他の日本人にその話をすると「すごい」と褒められることが多いとのことである。そのため1J2でその話をしたとき、A2に褒められることを期待していた。しかしその期待に反して、A2は4A2で「カナダだけ?」と言って褒めなかった。そのことについてJ2は「日本人にこの話をすると、皆『すごい』とか褒めてくれるのに、A2に褒めてもらえずショックだった。」とコメントしていた。J2が残念に思っていることは5J2の苦笑いや口調から分かるが、A2はそれに気付かず、さらに8A2ではJ2のカナダの話をさえぎって「ヨーロッパ、行ったことある?」と話題を変えている。

[会話例3]

1J2 : 2回 今まで ホームステイに行ったことがあって: . カナダに2回。

2A2 : ああ: ?

3J2 : うん。

→4A2 : カナダだけ?

5J2 : [苦笑いしながら] カナダだけ。ん: なんか カナダの端っこと端っこ

みたいな。

6A2 : あ: 分かった。

7J2 : に: 一回ずつ行って: で

8A2 : ヨーロッパ.. 行ったことある?

9J2 : あ: , ない: .

(6) 母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み

会話の最中、留学生が、自分の母語でのふるまいを日本語会話に持ち込むことで、日本人学生を不安にさせる例があった。報告されたのは、すべてA1の行動であった。思いつけないことばがあるとき、舌打ちをすることと、沈黙を埋めるために英語で何かを言うことである。舌打ちについてJ1は「A1が困っているということは分かったけど、舌打ちを聞くと自分が焦った。」とコメントしていた。英語で何かを言うことについて

は、「自分の知らない英語が出てきたらどうしようと不安に思っていた。」と述べていた。A1は話題の切れ目で沈黙がちになったときや、相手の質問にすぐに答えられず沈黙が起こったとき、その沈黙を気まずいと感じて、英語でも何でもいいから言えることを言って埋めようとしていたとのことである。

これらの行動は、一種の会話続行のためのストラテジーとも考えられるので、会話維持につながり、好意的に評価される場合もあるであろう。しかし、母語でのふるまいを日本語会話に持ち込むことが日本人学生を不安にさせるときには、非好意的評価につながると考えられる。

以上、非好意的評価を受けた会話行動について説明した。それぞれの項目について、各参加者が相手から受けたコメント数は表2のとおりである。

会話行動の類型	会話行動の例	A1	A2	計	J1	J2	計
(1) 相手への無関心	相手の話の最中何も質問しない			2		1	2
	相手の名前を覚えられない	1					
	相手の誘いに乗らない				1		
	別れの挨拶をしない		1				
(2) 自己開示の欠如	自分自身について情報提供しない			0		1	1
(3) 会話進行に非協力的な態度	雑談を盛り上げるための協力をしない(話題提供しない等)			0		2	2
(4) 避けたい話題の選択	相手が答えたくないと思う質問をする			0	2		2
(5) 褒めの欠如	相手が褒められることを期待しているときに、褒めない		1	1			0
(6) 母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み	思い出せないことばがあるとき、舌打ちする	1		2			0
	沈黙を埋めるために英語で何かを言う	1					

表2：非好意的評価を受けた会話行動

非好意的評価を受けた会話行動は、好意的評価を受けた会話行動とは異なり、日本人学生と留学生に共通して見られるものが少なく、「(2) 自己開示の欠如」、「(3) 会話進行に非協力的な態度」、「(4) 避けたい話題の選択」は日本人学生の側だけに、「(5) 褒めの欠如」、「(6) 母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み」は留学生の側だけに見られた。しかし、なぜこのような結果になったかは、本研究のデータの会話参加者数、コメント数が少ないため、特定することはできない。個人差、文化差、誤解など、さまざまなことが原因として考えられるので、今後、データの規模を拡大し、検

討を続ける必要がある。

4. おわりに

本研究は、日本人学生と留学生のそれぞれが会話において互いのどんな要素を好意的・非好意的に評価するのかを明らかにすることを目的として、オーストラリア人留学生と日本人学生を対象に、プレイバックによる会話時の意識調査を試みた。その結果、本研究のデータでは、好意的評価を受けた会話行動は「(1) 会話相手への関心表示」、「(2) 自己開示」、「(3) 会話進行のための協力」、「(4) リラックスした態度」の4つに、そして非好意的評価を受けた会話行動は「(1) 相手への無関心」、「(2) 自己開示の欠如」、「(3) 会話進行に非協力的な態度」、「(4) 避けたい話題の選択」、「(5) 褒めの欠如」、「(6) 母語でのふるまいの日本語会話への持ち込み」の6つに類型化することができた。

しかし本研究は2組の会話に基づく、小規模な事例研究であるため、本研究の結果を一般化することはできない。そのため、今後は、データの規模を拡大して、引き続き調査する必要がある。さらに、本研究が用いたデータは音声によるものだけなので、今後は映像データもあわせて収集し、非言語行動が言語行動に及ぼす影響についても検討していかなければならない。また今回、研究の対象としたのはオーストラリア出身の短期交換留学生であったが、今後は他の地域からの留学生や正規の学部留学生を対象とした調査も行なう必要があるであろう。

付記

本稿は、平成19年度日本語教育学会第3回研究集会における口頭発表「オーストラリア人留学生と日本人学生の会話における親密化の促進・阻害要因—プレイバックによる会話時の意識調査の試み—」の予稿原稿に加筆修正したものである。

注

- (1) 「好意的評価」には、「相手が～してくれてうれしかった」「相手が～してくれたから話しやすかった」等のコメントが分類された。「非好意的評価」には、「相手が～したからショックだった」「相手が～して嫌だった」等のコメントが分類された。「その他の評価」には、好意的とも非好意的とも言えないコメントが分類された。例えば、「びっくりした」、「自分とは違うなと思った」などがこれにあたる。
- (2) 会話例は話者交代の起こる箇所ので発話を区切り、それぞれのターンに番号と参加者を示すアルファベット記号を付けて、会話例の左側に一列に記す。参加者の一方がターンを取って話しつづけている間に、相手が「うん」、「ええ」とあいづちを打ったり笑ったりすることがある。そのようなあいづちや笑いはターンを取らずに行われるものなので、参加者を示すアルファベット記号のみを付ける。

- (3) 但し、どの程度個人的な質問をするのが良いか、どんな内容の自己開示をするのがよいか、どのくらいの頻度でするのがよいかという問題が残る。

トランスクリプトで用いられている記号

以下は本稿のトランスクリプトで用いられている記号である。Tannen (1984) の文字化システムで用いられている記号に修正を加えたものである。これ以外の記号が用いられる場合はそのつど必要に応じてその意味が説明されている。

- .. ストップウォッチで計れない程度の短い沈黙があることを示す。
... 0.5 秒の沈黙があることを示す。
. 語尾の音下がって区切りがついたことを示す。
? 語尾の音が上がっていることを示す。
: 直前の音が延ばされていることを示す。
行末の→ あいづちなど相手の発話が一時的に重なっているが、発話が継続していることを示す。
行頭の→ 分析の焦点であることを示す。
[] そのつど必要な注記であることを示す。
ハ 参加者が笑っていることを示す。
波線 発話者が笑いながら話していることを示す。
〔 複数行にまたがる括弧は参加者達の発話が重なっていることを示す。

主要参考文献

- 滝沢知子 (1995) 「外国人留学生の日本人学生との対人関係構築に関する調査研究」『日本語教育論集』12 国立国語研究所 pp.1-19
田中共子 (2003) 「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24 学生相談学会 pp.41-51
坪井 健 (1991) 「アジアの学生・日本の学生：留学生調査と日本・台湾・韓国の比較調査を通して」『駒沢社会学研究』23 駒沢大学文学部社会学科 pp.106-116
中山晶子 (2003) 『親しさのコミュニケーション』くろしお出版
西原鈴子編 (1993) 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム：日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究』国立国語研究所
横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5 異文化間教育学会 pp.81-97
Fairbrother, L. C. 2000. Analysis of intercultural interaction management within a party situation. *The Japanese Journal of Language in Society* 2:2, 33-42.
Neustupný, J. V. 1985. Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (Ed.) *Cross-cultural encounters: Communication and mis-communication*. Melbourne: River Seine Publications. 44-64.

Marriott, H. E. 1990. Intercultural business negotiations: The problem of norm discrepancy.

Australian Review of Applied Linguistics, Series S, 7, 33-65.

Tannen, D. 1984. *Conversational style*. Norwood, NJ:Ablex.